北山友松子　医案④

大阪の一富戸。正に傷寒を患い、発熱頭痛し、後に乾嘔、脇満、耳聾す。一医治を為し、六七日を過ぐ。四肢厥冷し、煩燥す。病家、事急忙、衆医に請い、治を議す。或いは参附湯を投ぜんと欲する者、附子理中湯を投ぜんと欲する者、四逆湯を投ぜんと欲す者あり。

予、後に其の病を得るの始末を聞くに至り、乃ち曰く、

「此れ即ち仲景謂う所の、邪三陽に在れば手足熱し、伝わりて大陰に到れば手足温となり、少陰に至れば逆して温ならず、厥陰に至れば、之が為に厥す。逆するに甚だしきなり。蓋し、熱より温にて至りて四逆し、厥を至す者は伝経の邪なり。

戴元礼、之を釈いて曰く、若し初め病を得て頭痛、発熱し、外に別に陽証有り、五六日に至りて方(まさ)に厥を発す。其の人厥すると雖も或いは熱を畏れ、或いは水を飲み、或いは手を揚げ足を擲げ、足煩躁し、眠るを得ず、或いは大便秘し、小便赤く、昏憒多き者は、此れ熱厥なり」と。

因て、黄連解毒湯を撮りて之を与えれば、厥弥(いよいよ)甚しく、更に昏憒を加う。衆皆薬の誤を咎む。予曰く、

「此れ、正に仲景の、前に熱する者は後に必ず厥す。厥深ければ熱も亦深しの訓えなり。遂に大承気湯を与え、耦方を作りて之を投ず。一服にて転失気し、二服して大便通ず。承気を去り、本法（黄連解毒湯）を用い、再服して手足温まり、後に補中益気以て調理して痊ゆ。